

四象八牛

黎平をゆく

2002年9月 貴州省黔东南苗族侗族自治州黎平県



雲南から貴州へ

8月末、旅に出てから2ヶ月が経とうとしていた。「もうそろそろ旅を終えて、住処である蘇州まで戻ろうか。」と思うようにもなった。今は、中国西南部の雲南省。ここから横断し、とにかく上海まで戻ることにした。「次の目的地は貴州省にしよう。」ということにした。

まずは昆明から列車で安順まで行くことにした。安順までの切符はあっさり買うことができて、出発。夜行列車に揺られて朝早くに到着した。まずはホテルを探して、荷物を置く。そして、さっそく観光へ。まずは鎮寧へ黄果樹瀑布と布依族の村などを見に行き、安順では有名な文廟などを見てまわった。

お次は、貴州省の省会である貴陽へ。貴陽でも郊外にある布依族の村を訪れた。日々発展を続ける中国だが、貴州はまだまだ貧しいところだ。ちょっと街を離れると、すぐに素朴な風景が広がる。ただ安順や貴陽の郊外では、民族衣装をまとった少数民族はかなり少なかった。布依族の村でも、お年寄りには民族衣装を着ている人もいたのだが、若者は違った。

黔东南州へ

貴陽からさらに東へ。いつも適当に計画して移動しているのだが、広西の桂林へ抜けようと思っていたので、貴陽から黔东南州を通って行くことにした。まずは凱里へ。いくつかのバスターミナルをまわって、凱里行きのバスを探すと、高速バスがあった。貴州もご多分に漏れず高速道路の整備が進んでいるようだ。

僅か2時間で凱里へ到着する。街に入ると、すぐに目に入ったのが少数民族だ。鮮やかな民族衣装をまとった彝族だ。市場で物を売っているらしい。華やかな民族衣装も売っているようだ。バスを降りて写真を撮りたいと思ったが、

とにかく終着のターミナルまで行く。

凱里では、ぐるっと街をまわってみたが、あまり面白いものはなかった。やはりこのあたりは、少数民族のお祭りがあるときに来る方がいいのかもしれない。まだ時間も早かったので、そのまま次の目的地、榕江へ向かった。

夜7時頃、榕江へ到着。安い宿はないかと探す。渉外のホテルがあったので、そこに決めてチェック・イン。腹ごしらえのために外へ。そしてホテルへ戻ると、フロントで呼び止められる。「すみません、ここは外国人を泊められなかったのです、他のホテルへ移ってください。」



▲ 邑沙村、苗族の人々

と言われる。「ええ、ここ涉外じゃないの。」と聞き直すと、「涉外なんですけど、外国人は指定されたホテルしかダメなんです。」との答え。しょうがない、夜も遅いが言われた宿へ移ることにした。どうも県政府の経営しているホテルじゃないとダメらしい。「お、さっきのホテルより安いじゃん。」安ければ嬉しい貧乏旅行者の私は変に納得してしまった。

次の日は、朝から散歩がてらに街外れへ。近くには侗族の村が多い。村に近づくにつれ青い民族衣装を身にまとった人々が多くなる。侗族の特徴ある建築物もたくさん目に付くようになる。車江郷というところに入っていくと、章魯村にたどり着いた。この村の人々が話す言葉が侗族語の標準音になるそうだ。

お次は从江へ

榕江の次は从江へ。从江では街から10kmほどのところにある苗族の村、岜沙村へ行ってみることにした。朝早く出発。道沿いにあるらしいので徒歩で行く。途中でも民族衣装を着た彝族の女性などに会った。さて、この村は県城から近いのだが、住民たちは伝統を大切にしている。女性ばかりではなく、男性も民族衣装を着ているのだ。藍染めの衣装は地味だが、なかなかいいものだ。この村では、若者がたとえ村を出て働きに行っても、村へ里帰りするときには必ず民族衣装を着なければならないそうだ。今回、たまたま訪れただけなので、村人達は普段の生活を送っているだけだったのだが、この村でもお祭りがあるらしいので、そのときに訪れれば、楽しいのかもしれない。村の子供や、若い女性は外来者に慣れていないようで、私のことも、遠くから不思議そうに見つめるだけだった。伝統を大事にする村のようなので、あまり邪魔をしないように足早に从江の街へ戻ることにした。

さて、黎平へ

さて、前置きが長くなったが、ようやく黎平へ行くこととする。実は黎平へ行く目的は侗族の街、肇興へ行くこと、地坪風雨橋を見ること



▲岜沙村、苗族の男

だった。だから从江からだと、黎平の県城である徳鳳鎮まで行く必要はない。从江のバスターミナルで、肇興から近い洛香鎮行きのバスを見つけたので、それに乗ることにした。ところが待てど暮らせど出発しない。いい加減待つのも嫌になったので、徳鳳鎮行きのバスに乗り換えたのだ。予定にはなかったが、何か見所もあるようなので、とにかくそこまで行ってみることにした。

黎平へ到着。さっそく宿を探す。いちおう、外国人の泊まることができる涉外のホテルをあたってみる。あつた、どうも街一番のホテルらしい。「まあ、安ければここでいいか。」と、フロントで値段交渉する。ツインが4割引で70元だ。ところが登記のためにパスポートを出すと、「え、あなたは外国人？ ごめんなさい、外国人には割引できないの」と言う。こんなことは初めてなので、「どうして？」としつこく食い下がる。相手も根負けしたのか、「じゃ、10元だけ」と言う。むう、無念なり。



▲ 翹街



▲ 黎平会議会址

徳鳳鎮をひとまわり

ここ、徳鳳鎮をひとまわりする。それほど大きな街ではないので、徒歩でも街中を十分にまわることができる。徳鳳鎮はけっこう歴史のある街らしい。明洪武年間に街が出来はじめる。その古い建物が建ち並ぶ「翹街」と呼ばれる通りがある。通りの両端が高くなっており、真ん中が低くなっているのので、ちょうど鳥の羽のようになっているかららしい。

もう一つ「黎平会議会址」というところがある。长征のときに毛沢東などが会議を行った場所である。まあ、中国共産党関連なので、面白くはないのだが、とにかく入ってみた。ほんとうに面白くない。．．．やはり中国の歴史で興味を持てるのは清代までだな。

さて、肇興へ行くぞ

次の日、バスターミナルから肇興行きのバスに乗る。肇興は侗族の村だ。特徴は5つある鼓楼だ。欧米人がよく訪れるらしく、村には英語の看板を掛けた宿もある。ただ交通もそれほど便利ではないので、観光ズレしているというほどでもない。村の中には屋根付きの橋、風雨橋もいくつかかかっている。村の大通りには市がたっており、いろいろな物が売られている。私



▲ 肇興の鼓楼

も食べ物を買って食べてみる。餅のような食べ物だったが、あまりおいしくない。買い物はほとんどに、村をぐるっとまわる。木造で黒瓦の建物が並んでいる。戯台もある。鼓楼の下では村人達が集まり、くつろいでいる。のどかだ。



▲ 肇興の風雨橋



▲ 肇興の戲台

さて、ここ肇興に宿泊しようかと思ったのだが、まだ時間も早いので先を急ぐことにした。「今日はまだ地坪へ行けるバスがある？」と村人に聞いてみる。「おお、まだあるぞ。もうしばらくすると来る。」との答えだ。行き交う人々を眺めながら、道端でバスを待つ。来たぞ来たぞ。さっそく乗り込む。かなりボロボロのバスだ。中には荷物が満載されている。どうも普通のバスではないようだ。実はこのバス、郵政のバスだったのだ。交通の便が悪いこのあたりなので、郵政のバスでも客を乗せて走っているようだ。しかしまあ、シートも壊れていて、乗り心地もかなり悪い。しかし、とにかく目的地までたどり着けるなら、どんな乗り物だっていいのだ。バスは肇興を出発。村はずれから村の方を眺めると、5つの鼓楼。綺麗だ。



▲ 肇興、民家の軒先

地坪風雨橋は素晴らしい

ボロボロに揺られること1時間半。地坪へ到着した。ここも小さな村だ。さて、お目当ての風雨橋を探す。小さな村なので、ちょっとフラフラとあるくと、すぐに見つかった。村を流れる川にかかる橋。ただの橋ならどうでもいいのだが、侗族の技術の結晶である風雨橋である。さっそく、橋の方へ歩いていく。遠くから眺めるだけでも、その姿は美しい。さて、橋を渡ってみる。木造なのだが、釘などはまったく使われていないのだ。鼓楼といい、風雨橋といい、これだけの建築技術を持っているとは驚きだ。



▲ 地坪風雨橋

橋を渡ると子供達がたくさんいる。橋の向こうには小学校があるようだ。しばらく、橋の中で腰掛けて休憩する。やっぱりのどかだ。時間がゆっくりと流れているような気がする。

さて、駆け足で見て回った黎平だったが、なかなか楽しむことができた。ただこのあたりはやはりお祭りがあるときに来た方が、何倍も楽しめるのだろうと感じた。のどかな風景だけでも満足なのだが、せっくなのだから少数民族の風俗風習を最も味わえるお祭りに参加できれば最高だろう。「次回はぜひともお祭りがあるときに訪れたい。」と思いつつ、貴州を離れ広西三江へと向かうのであった。再見。